説教要旨『その叫びを聞く』

出エジプト記　２２章２０～２６節

ある神学者は言います。「挫折と悲哀こそがその兄弟達と共感し合い、交わるためのパスポートである」と。

本日の箇所には、寄留者や寡婦や孤児、貧しい者を保護するための掟が記されていました。その理由や動機に、特徴があります。「あなたたちはエジプトの国で寄留者であったから」、「（寡婦や孤児を苦しめるなら）〔神の〕怒りは燃え上がり、あなたたちを剣で殺す。あなたたちの妻は寡婦となり、子供らは、孤児となる。」、「（貧しい者の服を質にとって返さないでいたら）彼は何にくるまって寝ることができるだろうか」…彼ら彼女らの置かれている境遇や苦しみに思いを馳せ、さらには、その人々の叫びを神が「聞」いておられることを思い起こすようにと促しています。これら社会的弱者の置かれた境遇は、かつてイスラエルの民がエジプトに寄留していた際に経験してきたものでした。神は、エジプトで過酷な労働と虐待、貧しい生活に苦しめられていたイスラエルの民の叫びを聞き、脱出を導いていきました。ですので、本日の掟は、イスラエルの民の経験と感情に直接訴えかけてくるような躍動感があったと言えます。神の側からすれば、「あなた達なら、寄留者や寡婦や孤児、貧しい者の叫びを受け止められるはずだ」という思いを込めていると言えるでしょう。「主が心引かれてあなたたちを選ばれたのは…他のどの民よりも数が多かったからではない。あなたたちはどの民よりも貧弱であった」（申命記 7:7）という神の選びの理由が思い起こされます。

それから約 1500 年後。イエスは「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ」(ヨハネ福 15:16)と弟子達に言われました。彼らの裏切りを予告し、彼らの心の弱さを十分にご承知の上でそう言われたのです。そして実際、弟子達は、親愛なるイエスを裏切り、見捨て、ただイエスが侮辱され、痛みつけられながら、十字架の上で叫び死んでいく姿を見ているしかなかった…そんな自分達の如何ともしがたい人間的な弱さと向き合わされていくことになります。しかしそれ故にこそ、主イエスを通して示された神の愛と赦しの深みが彼らの心に沁みていったのです。かつてイエスが教えられていた、「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい」(ヨハネ福 15:12)との掟は、そんな弟子達の経験と感情に直接訴えかけるような躍動感を帯び始めたことでしょう。私達もまた、それぞれに抱える挫折と悲哀を携えながら、誰かとつながり、誰かと共に生き、誰かの叫びを聞くことへと遣わされているように感じます。人を愛するために、「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ」と言って下さる主イエスを信じつつ。

（文責：望月達朗牧師）